

死させるという方法である。この防除法は、昨年、すでに、実用化試験に成功しているという
ことであつた。

昭和48年度茶園関係除草剤・ 生育調節剤試験成績概要

農林省茶業試験場 青野英也

昭和48年度における茶園関係の除草剤・生育調節剤関係の試験件数は、除草剤3件、生育調節剤4件の計8件で、除草剤については茶業試験場、同枕崎支場、京都府立茶業研究所、福岡県農試茶業指導所、大分県農業技術センター、三重県茶業センター、静岡県茶業試験場において試験が行なわれ、生育調節剤については農業

技術研究所、茶業試験場、福岡県農試茶業指導所、滋賀県茶業指導所、埼玉県茶業試験場、三重県茶業センター、奈良県農試茶業分場で検討が行なわれた。この試験成績検討会が、昭和49年2月23日茶業試験場で行なわれたので、その概要を報告する。

昭和48年度茶園関係除草剤・生育調節剤試験成績審査判定表

1 除 草 剤

薬 剤 名	有効成分及び含有率	判 定	内 容	委 託 者 名
HW-213 水和剤	N-[1-o-r-2(3a,4,5,6,7,7a-haxahydro)-4.7 methanoindanyl]-n-dimethyl-urea 50%水和剤	○ 土壌処理 実用化・継続	20~25g/aの施用で有効であるが、国立場所だけの成績であるので、49年度は2~3の公立場所で継続検討する。	保土ガ谷化学工業
		○ 発芽初期処理 継 続	メヒシバ発芽初期(2葉開葉時)に薬量をもう少し多くして処理する。	
MCC(粒状スエップ)	メチル-N-(3,4-ジクロロフェニル)カーバメイト粒剤15%	実用化・継続	春処理については茶試、三重県茶業センターで薬臭の有無を中心に検討し、夏処理については、さらに薬量、薬臭を中心に継続検討する。	スエップ普及会

薬 剤 名	有効成分及び含有率	判 定	内 容	委 託 者 名
MK-616	N-P-chlorophenyl -tetrahydrophtalim- -imide 粒剤 5%	○雑草発生前処理 ○雑草発生初期処 理 ともに継続	試験場所数を増やし、施用量を、 15～30g/aに中心をおいて 継続検討する。	三菱化成工業

2 生育調節剤

薬 剤 名	有効成分及び含有率	判 定	内 容	委 託 者 名
ルチエース	5-クロロインダゾール酢 酸(Na塩)0.05%および、 0.1%含有する粉剤	継 続 ?	対照薬剤ルートンと比較して効果 はやや劣り気味で、粉剤という点 も実用上やや問題。	日 産 化 学
ミクロンC	パラフィンワックス及びカル ナウバワックスの相融ワッ クス乳分散液(固型分) 40%前後	継 続	チャのさし木への応用を目的に検 討したが、他の目的、例えば気象 災害、寒干害防止等への利用を考 える。	日、本 技 研
G-PAA	天然有機高分子化合物2%水 溶液	継 続	現在実験進行中	エ ー ザ イ
ネマモール粒剤 30	DCIP, 22, ジクロルジ イソプロピルエーテル	継 続	施用量を5, 8, 10kg/10a とし、もう少し場所数を増加する	昭 和 電 工

I 除 草 剤

1. HW-213 —土壌処理—

担当場所 茶業試験場、同枕崎支場

2場所での試験結果から、HW-213土壌
処理の抑草効果は、春夏の試験を通じて50日
～70日程度認められ、対照薬剤CATとの比
較でも、30日後まではHW-213のほうが、
抑草効果はまさっている。また前年度より施用
量を5g増して25g/a区を設けているが、
20g/a施用区との差ははっきりしなかった。
なお、1年生広葉雑草イヌタデ(枕崎支場)、
およびカヤツリグサ(本場)の抑草効果は判然
としなかった。

以上の結果から、HW-213の土壌処理は
メヒシバ等の抑草に有効と思われるが、試験場

所数が少ないので、2～3の公立場所において、
継続検討することとした。

2. HW-213 —発芽初期処理—

担当場所 茶業試験場、同枕崎支場

茶試本支場の成績ともにHW-213の殺草
抑草効果は認められているが、対照薬剤リニエ
ロンと比較すると、その効果は必ずしもまさる
とはいえない。またメヒシバだけに限ればかな
り効果がみられるが、カヤツリグサなど非イネ
科雑草に対する効果は劣るようである。

全般に雑草が生長するにしたがつて効果は劣
る傾向があるので、処理期をメヒシバの発芽初
期(2葉開葉期)と規定し、薬量をやや増加し
て、継続検討することとした。

3. MCC(粒状スエップ)

担当場所 茶試枕崎支場、京都府立茶業研究
所、福岡県農試茶業指導所、大分県農業技術セ

ンター、三重県茶業センター

受託5場所のうち福岡県農試の春季試験で、効果が認められなかったほかは、春、夏季の試験ともに効果があり、対照薬剤CATと比較して同等か、まさる場合が多かった。さらに施用量については、前年度春処理の場合70～90g/aで実用化されているが、本年春、夏季の試験を通じて、春処理の場合60～75g/a程度で抑草効果は高く、夏季処理でも120g/aで十分有効であることを認めている場所が多い。またチャに対する薬害、および製品についての異臭の有無などについて検討したが、多くの場所で異常が認められなかったが、三重県茶業センターではやや異臭を認め、香気が劣ることを報告している。

以上から粒状スエップについては、抑草効果については十分認められるが、製品への影響に若干疑問が残るため、この点を中心に継続検討することとし、夏季処理についてはさらに施用量について検討することとした。

4. MK-616 ー雑草発生前処理ー

担当場所 茶業試験場、静岡県茶業試験場

2場所での試験結果は、ともに長期（春処理で50～70日、夏処理で30～50日）にわたって抑草効果がみられ、CATより効果はまさり、また水和剤より粒剤のほうがまさった。さらにその効果は処理前後に適度の降雨のある場合より大きかった。

以上のように抑草効果は十分認められるので、さらに薬量を15～30g/a程度に減少し、試験場所数も増加して継続検討することとした。

5. MK-616 ー雑草発生初期処理ー

担当場所 茶業試験場、静岡県茶業試験場

静岡県茶試の成績によると、MK-616粒剤区は効果の発現が早く、5～7日後にメヒン

バの幼葉は褪色し、萎凋し始め、30日後に再生したものは少なく、茶試でも70日後まで殺草効果は大きかった。

このようにMK-616の雑草発生初期処理は、発生前処理と全く同様の抑草効果を示したので、この場合も薬量等を中心に、場所数を増やして継続検討することとした。

Ⅱ 生育調節剤

1. ルチエース

担当場所 福岡県農試茶業指導所、滋賀県茶業指導所

チャのさし木発根に及ぼすルチエースの効果について、福岡県農試の場合、根重ではやぶきた、やまなみともに、ルートン>ルチエース>無処理の順となり、地上部の生育では40日後の調査の場合、やぶきた、やまなみの新梢長でルチエースがまさったが、総じて両品種ともにルチエースは、ルートンより劣っている。また滋賀県茶指の結果をみても、根重については各品種とも、無処理区と比較してまさる場合が多いが、有意差は認められず、むしろルートンのほうがよりすぐれている場合が多かった。

以上からルチエースについては、対照薬剤ルートン以上の効果があまりみられないこと、さらに粉剤であることが実用上不利であることも加味して、継続?とした。

2. ミクロンC ーさし木の活着促進とかん水の節減効果ー

担当場所 茶業試験場、埼玉県茶業試験場、福岡県農試茶業指導所

茶試の成績では、ミクロンC10倍区の消費量が最も少なく、20倍区も5%程度の水量節減がみられ、蒸散抑制効果がみられたが、新芽

新根の發育に対しては抑制的に働いているため、実用上の評価は速断できないとしている。また埼玉茶試ではポット当たり用水量をみると、ミクロンC 10倍区が少なく、他の処理区もやや少ないようである。またさし木後の生育状態についても、ミクロンC 20～40倍区は新芽、新根の生長ともにまさる場合が多かった。しかしこれらは室内実験で自然降雨がないので、露地でも試験してみる必要があるとしている。

3. ミクロンC —さし穂の貯蔵に関する効果—

担当場所 茶業試験場、埼玉県茶業試験場、福岡県農試茶業指導所

茶試の成績では、ミクロンCを処理後10時間以上放置した場合、その濃度が高いほど水分の減少を抑制し、20時間以上放置した場合でも、ミクロンCの10倍区は無処理区の約60%に止まっている。しかしさし木後の新芽の生長、根の生長に対しては抑制的に働く傾向が認められ、応用的な評価はむづかしいとしている。

また埼玉県茶試の成績でも、採穂園での蒸散抑制効果はきわめてわずかで、さし木後の生育も、散布処理の効果はほとんど認められなかった。そうしたことから採穂園での散布より、さし穂を調整後に浸漬処理するほうが均一な処理ができ、効果が增大するのではないかと推論している。

さらに福岡県茶指の場合、散布10、20時間後では無処理区の減水量が、処理区よりやや多くなったが、各処理区間ではほとんど差がみられず、さし木40日目、90日目の調査結果でも、発根状態、地上部の生育状態ともに判然としなかった。

以上のように各場所とも、ミクロンCの散布により、蒸散抑制効果が認められ、水分消費を

抑制したが、さし木苗の発根、生長に対しては、むしろ抑制的に働く場合が多く、むしろ、他の目的例えばこの蒸散抑制効果を利用して、寒干害防止効果を狙うなど、他の目的に応用するため、継続検討することとなった。

4. G-PAA

担当場所 農業技術研究所

農技研では高分子被膜剤としてG-PAAの開発を行ない、diffusion porometerによる被覆の蒸散抑制率の測定と、吸水測定装置を使つての、チャの人工気象室内での風速変化に対する吸水変化と、蒸散抑制による吸水変化を測定中である。この場合人工気象室内の環境条件では、風速の増加により吸水量は減少し、G-PAAで被膜した場合、風速が増大するにつれて、吸水には抑制効果の生じる傾向が認められている。今後チャを用いて、diffusion porometerによる蒸散抑制と、吸水測定装置による吸水抑制とを、種々の気象条件下で究明し、関係づけていく予定であるとしている。

5. ネマモール粒剤30 —さし木の発根、生育促進—

担当場所 三重県茶業センター、奈良県農試茶業分場

さし木床におけるネマモールの処理が、さし木の発根、その後の生育に及ぼす影響については、三重県茶業センターの場合、さし木60日、90日後の調査では、処理効果は明確でなかったが、90日後の場合根長がややすぐれている。しかし全般的に施用量をもう少し増やして検討する必要があるとしている。一方奈良県農試では、ネマモールの処理効果は90日後にみられ、根重、根数での効果が大きく、したがって新梢長もまさっている。また処理量としては、5 kg/aが適当であるとしている。

以上のように受託2場所によって、その効果は相反した結果が得られているので、施用量を5～10kg/aと幅広くとり、試験場所も増やして継続検討することとした。

〔付記〕 以上のほか、本検討会議では昭和47年度冬季に行なったアビオンーE200、OEDグリーンのチャの寒干害防止効果に関する試験結果も検討された。この成績ではアビオ

ン、OEDともに寒干害防止効果はある程度認められたが、47年度の冬は比較的暖冬のことであって、それほど明確ではなかった。

アビオンについては引き続き昭和48年度も継続検討中であり、特にこの冬は乾燥ときびしい低温に見舞われているため、この年の検討をまっけて結論づけることが約束された。

昭和48年度落葉果樹関係除草剤・ 生育調節剤試験成績概要

農林省果樹試験場栽培部栽培第二研究室長 山崎利彦

昭和48年度における委託試験は除草剤4点（5件）、生育調節剤9点（19件）で、これら供試薬剤の試験成績検討と仮判定会議が49年1月31日（東京）に各場所の試験担当官の参集のもとに行なわれた。

結果の概略は次のとおりであった。

I 除草剤試験成績概要

昭和48年度 落葉果樹関係除草剤試験成績判定表

薬 剤 名	委 託 者	樹 種	品 種	判 定		使用法・検討事項
				前 回	今 回	
DPA・DCMU・MCP粒剤	石 原 産 業	ブドウ	デラウェア	継	継	若木に対する薬害抑草剤としての使い方
MON — 39 乳剤	日本モンサント	ブドウ	デラウェア キャンベル アーリー他	継	実	: 500ml/50~100l
					継	: 薬害を検討
SL — 29 乳剤	石 原 産 業	ブドウ	デラウェア	新 規	継 ?	
SL — 54 乳剤	石 原 産 業	ブドウ	デラウェア	新 規	継 ?	
DPA・DCMU・MCP粒剤	石 原 産 業	ナ シ	長十郎	継	継	